

『歴史』と『征服』におけるハーリド・アルカスリーと第三次内乱

Khālid al-Qasrī and the Third Civil War
in the Umayyads Described in “Ta’rīkh” and “Futūḥ”

松 本 隆 志

要 旨

ウマイヤ朝後期のイラク総督ハーリドは、『歴史』と『征服』の二史料間で、質量ともに大きく描かれ方が異なっている。本稿はこのハーリドに関する叙述を二史料間で比較検討したものである。その結果として、ハーリドに関する言及の多い『歴史』では、その理由が南北アラブの部族間対立の文脈に求められ、ウマイヤ朝末期の第三次内乱においてハーリドおよび部族間対立が原因の一つとして機能していることがわかった。他方、ハーリドへの言及が少ない『征服』では、部族間対立の文脈は見られず、第三次内乱はウマイヤ家の内部抗争として描かれていることがわかった。本稿で明らかとなった叙述傾向の相違は、両史料の叙述全体についても反映している可能性があるものと考えられる。

キーワード

ウマイヤ朝、ハーリド・アルカスリー、第三次内乱、タバリー、イブン・アアサム

はじめに

ウマイヤ朝10代カリフ・ヒシャーム Hishām b. ‘Abd al-Malik b. Marwān (位:724-745年)の約20年間の治世から、第三次内乱を経て最後の14代カリフ・マルワーン2世 Marwān b. Muḥammad b. Marwān (位:744-750年)に

至るウマイヤ朝後期は、初期イスラーム史上の重要な転換期であった。この時期には、イスラーム史上最初の王朝であるウマイヤ朝の崩壊と、やがてアッバース朝を成立せしめる革命運動の進行という二つの展開が同時に進行していたためである。そのため、この時期の歴史をどのように叙述するかという問題は、ウマイヤ朝とアッバース朝という二つの王朝をどのように評価して歴史的に位置付けるかという問題と、深い繋がりを有していることが想定される。この問題について、従来の先行研究では、アッバース朝革命の展開に注目が集中する傾向があった¹⁾。その反面、一連の先行研究が依拠する各史料はウマイヤ朝後期の歴史をどのように理解していたのかという点については、近年になって研究が進み始めたところであり、基礎的な研究の蓄積が未だ不足している²⁾。そこで本稿では、ウマイヤ朝の、特にヒシャム期から第三次内乱に至る史料叙述について、分析をおこなっていく。史料上でウマイヤ朝崩壊の展開がどのように位置付けられているのかを明らかにするためには、第三次内乱がいかなる展開の中で生じたのかを明らかにする作業が不可欠だと考えるためである。

本稿で分析の対象とする史料は、タバリー al-Ṭabarī, Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr (d.310/923) の『諸使徒と諸王の歴史』*Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk* (以下『歴史』)³⁾と、イブン・アアサム Ibn A'tham al-Kūfī, Abū Muḥammad Aḥmad (d.ca.314/926) の『征服の書』*Kitāb al-Futūḥ* (以下『征服』)⁴⁾の二史料である。初期イスラーム時代における歴史叙述のあり方については、現存する史料に記された歴史情報は概ね9世紀頃にまとめられ、そこから『歴史』に代表されるような客観性と整合性を重視した歴史叙述と、『征服』に代表されるような物語的な歴史叙述とに分岐していったとの見解が提示されている⁵⁾。両史料の叙述の傾向性に関する評価についてはより詳細な検討が必要であると思われるが、両史料が初期イスラーム史、特にウマイヤ朝史を記した史料として代表的なものであることについて

ては、筆者も同意するところである。筆者は両史料叙述におけるウマイヤ朝史の描かれ方を継続的に分析しており⁶⁾、本稿もその一端である。

また、分析にあたってはヒシャーム期にイラク総督を務めたハーリド・アルカスリー-Khalid b. 'Abd Allah al-Qasri という人物に注目する⁷⁾。ハーリドは南アラブ系のバジーラ族という弱小な部族の出身であったが、祖父の代からムスリムであり、ウマイヤ朝に最初期から仕えた一族であったとされている。ウマイヤ朝6代カリフ・ワリード1世 al-Walid b. 'Abd al-Malik b. Marwān (位:705-715年)の時にメッカ総督を経験し、ヒシャームの即位直後にイラク総督に任命された。いずれの総督期においても、特に注目すべき大きな事績が史料上で記されているわけではない。しかし、このハーリドに関して、『歴史』にはまとまった量の言及があるのに対し、『征服』にはほとんど言及がない。このことから、ハーリドの描かれ方に注目することで、ウマイヤ朝後期の歴史展開に関する、両史料の理解の相違を示すことができるようになると思われる。

以上の問題意識のもと、以下の本論ではハーリドのイラク総督任命から第三次内乱までの時期について、ハーリドの描かれ方を中心として『歴史』と『征服』の叙述を比較検討していく。

I. ハーリドのイラク総督任命

1. 『歴史』の叙述

ハーリドのイラク総督任命時の叙述は、三つの情報から構成されている。最初に、105年シャッワール月/724年3月にヒシャームがハーリドをイラク総督に任命したことが述べられる⁸⁾。その後、ハーリドの任命にまつわる二つの伝承が述べられている。まず、ヒシャームとハーリドの会話に対するタミーム族のウマルという人物による批判が、次のように述べられている。

私（ウマル）がヒシャームのもとへ行くと、ハーリドもそこにいた。彼（ハーリド）は彼（ヒシャーム）に、ヤマンの忠誠について語っていた。そこで私は大きく手を打ち鳴らして次のように言った。「神かけて、私はこのような馬鹿げた誤りは見たことが無い。神かけて、イスラームの中で内輪揉めを始めるのはいつもヤマンである。信徒の長ウスマーンを殺害したのは彼らである⁹⁾。信徒の長アブドゥルマリク[への忠誠]を放棄したのは彼らである¹⁰⁾。我らの剣にはいまだムハラブ家の血が滴っている¹¹⁾」そして私が立ち上がると、同席していたマルワーン家の者が追いかけてきて次のように言った。「タミーム族の兄弟よ、私の炎は貴方によって灯された。私は貴方の発言を聞いた。[しかし] 信徒の長はハーリドをイラク総督に任命してしまった。今や貴方の居場所は無い¹²⁾」。(引用中の丸カッコは代名詞等の説明、四角カッコは訳出上の補足、下線部筆者。以下同様)

ヒシャームとハーリドの会話を聞いた北アラブ系タミーム族の第一伝承者ウマルが、南アラブ（ヤマン）に対する非難を発言している。これに対してマルワーン家¹³⁾の者が、同意を示しつつも発言を控えるよう論している。この場面では、北アラブから南アラブに対する非難という形で、南北アラブの部族間対立があらわれていることがわかる。

この伝承に続いて、今度は南アラブの立場から、ハーリド任命時の伝承が述べられている。この伝承は長くて煩瑣になるため、全文の引用は避けるが、第一伝承者である南アラブのズィヤードという男が、偶然ハーリドと出会い、イラクへの同行を誘われる。

ある日、私（ズィヤード）がヒシャームの部屋の扉の前にいたところ、ある男が扉から出てきて、私に尋ねた。「お前はどこの出身だ、

若者よ」。私はヤマンであると答えた。すると彼は私に何者かと尋ねた。私はズィヤード・ブン・ウバイドゥッラー・ブン・アブドゥルマダーンであると言った。

(中略)

私は尋ねた。「貴方は誰だ。神が貴方を祝福されたのか」。彼は言った。「ハーリド・ブン・アブドゥッラー・アルカスリーだ。すぐに人々に命じるのだ、若者よ。私の頭衣と黄色い馬をお前に与えよう」。私が数歩行くと、彼は「私を」呼んで言った。「若者よ、いずれ私がイラク総督に任命されたと聞いたなら、私のもとに来るのだ」¹⁴⁾。

その後、ハーリドのイラク総督任命を聞いたズィヤードはイラクへ向かい、ハーリドに仕える。やがてズィヤードは書記術を学んでハーリドのもとで出世していき、最終的にはハーリドのシュルタ長官となる¹⁵⁾。この伝承は、ハーリドのもとでの南アラブの若者のサクセス・ストーリーといえる。

以上が『歴史』におけるハーリド任命時の叙述である。二つの伝承ではヒシャームによるハーリド選任の理由や過程は一切述べられておらず、第三者による語りで構成されている。そしてその語りは、北アラブと南アラブの双方からおこなわれており、北アラブの視点からはハーリドを南アラブの代弁者とみなして非難する語りが、南アラブの視点からはハーリドが実際に南アラブの若者を重用する語りが、それぞれ述べられている。この場面の『歴史』の叙述からは、南北アラブの部族間対立という文脈を背景として、南北アラブ双方の視点から、ハーリドと南アラブの親近性が提示されていることが読み取れる。

2. 『征服』の叙述

内容は次の通りである。ヒシャームは即位直後に、前カリフであるヤズィード2世のイラク総督であったイブン・フバイラ Yazīd b. ‘Umar b. Hubayrah al-Fazārī の解任と、ハーリドの任命をおこなう。そしてハーリドに対し、イブン・フバイラを捕縛してその財産を没収するよう命じている。

そして彼（ヒシャーム）はイブン・フバイラをイラクから解任し、後任にハーリドを任命した。

（中略）

イブン・フバイラを捕えて拷問し、彼がイラクから獲得した財産の中で彼の手元に残ったものを吐き出させるように命じた¹⁶⁾。

そしてハーリドはイラクに着任後、ヒシャームの命令を実行する。激しい拷問を受けて叫ぶイブン・フバイラの様子が述べられている。

曰く：ハーリドは両イラクの総督として着任し、バスラに滞在していた。彼はイブン・フバイラを捕えると、彼に様々な拷問を加え、財産を要求した。

（中略）

曰く：イブン・フバイラは、激しい拷問の痛みから、声を上げて次のように言った。「ヒシャームよ、ヒシャームよ、ハーリドの拷問から救い給え」¹⁷⁾

この後、イブン・フバイラは脱走するが、ハーリドの派遣した搜索隊に見つかり、殺害される。

曰く：そしてハーリドはイブン・フバイラの脱獄を知った。彼（ハーリド）は彼（イブン・フバイラ）の探索に、ある男を派遣した。その男はマーリク *Malik b. al-Mundhir b. al-Jarūd al-'Absī* といった。マーリクは自分のギルマンたちを率いて出撃し、やがて街道上でイブン・フバイラに追い付いた。彼（イブン・フバイラ）はシリアへと向かっていた。彼（マーリク）は彼（イブン・フバイラ）を殺した。そして彼はハーリドのもとへ戻り、そのことを報告した¹⁸⁾。

しかし、ヒシャームはイブン・フバイラ殺害を知って激怒する。彼は殺害を実行したマーリクを召喚し、次のように罵っている。

「神がお前に平安を与えることはなく、お前に長命をもたらすこともなく、お前を歓迎することもなく、親しみを抱くこともないのだ、神の敵よ。お前はイブン・フバイラを殺した。父親についても、母親についても、見識においても、系譜においても、*rīsh* においても、終わりににおいても、彼はお前よりも優れていたのだ」¹⁹⁾

そしてマーリクはヒシャームによって投獄され、そのまま死に至る²⁰⁾。

以上の『征服』叙述において、ハーリドの任命理由が明示されていない点は『歴史』と同様である。しかし、『征服』の叙述の中心がハーリドではなく、むしろイブン・フバイラの解任から死に至る過程にあることは明らかである。特にハーリドによる拷問の恐ろしさをイブン・フバイラが叫ぶ場面や、イブン・フバイラ殺害に怒ったヒシャームによるマーリクの処罰といった、『歴史』では述べられていない叙述にそのことがあらわれている。また、『歴史』で述べられていたような、ハーリドの任命にまつわる南北アラブの部族対立の文脈はまったく述べられていない。ハーリドの

命令でイブン・フバイラを殺害したマーリクは、ガタファーン族中のアブス族出身であり、イブン・フバイラと同じ北アラブに属している。その一方で、それでは『征服』ではイブン・フバイラに関する叙述が大きな位置を占めているのかということ、そうとも言い難い。イブン・フバイラのイラク総督任命の叙述はヤズィード2世の治世の末尾で述べられており、上に引用した個所の直前にあたる²¹⁾。つまり、イブン・フバイラの事績についてもほとんど述べられていないのである。したがって、この場面の『征服』の叙述においては、前任総督イブン・フバイラや新任総督ハーリドといった個人に対する注目や、両者にまつわる何らかの文脈は見出されない。イラク総督の交替にともなう前任者の顛末という事象が完結性をもって述べられているのだと考えられる。

II. ハーリドの解任

ハーリドのイラク総督在任中の活動については、『歴史』と『征服』ともにあまり述べられていない。わずかな叙述についても、ハーリド自身に関する叙述はほとんどない。このため、ハーリド在任中の叙述は省略して、本章ではハーリドの解任の場面について分析をおこなっていく。

1. 『歴史』の叙述

ハーリドの解任理由について、『歴史』では複数の理由が述べられている²²⁾。それらをまとめると、大きく二つの理由にまとめられる。第一に、ハーリドがイラクで得た莫大な収入に対するヒシャームの関心が述べられている²³⁾。例えば次のような叙述である。

やがてハッサーン *Hassān al-Nabaṭī* がヒシャームのもとにやってきた。ヒシャームは言った。「近くに来い」。ハッサーンは近付いた。彼

(ヒシャーム)は彼(ハッサーン)に言った。「ハーリドの収入はいくらだ」。ハッサーンは答えた。「1300万 [ディルハム] です」。ヒシャームは尋ねた。「お前がそのことを私に伝えなかったのは、どうしたことだ」。ハッサーンは答えた。「貴方は問われましたか [問われなかったからです]」。この記憶がヒシャームの心中にしっかりと根付いた。その結果、彼はハーリドの解任を決意したのである²⁴⁾。

そして第二に、ハーリドの言動に対するヒシャームの怒りである²⁵⁾。こちらも一例をあげれば次の通りである。

あるシリア軍の男がヒシャームのもとにあらわれて次のように言った。「ハーリドが信徒の長について、二つの唇から離れてはならない言葉でもって言及していたのを、私は聞いた」。ヒシャームは遮って言った。「斜視のことか」。男は言った。「いや、彼はもっとひどいことを言った」。ヒシャームは尋ねた。「何と言ったのだ」。男は言った。「私には決して言えない」。ヒシャームはハーリド [の発言] について聞くことをやめなかった。これによって彼(ヒシャーム)は、彼(ハーリド)に対する態度を変えるほどに嫌うようになった²⁶⁾。

こうしてハーリド解任を決意したヒシャームは、密かにイエメン総督であったユースフ Yūsuf b. 'Umar al-Thaqafi にイラク総督任命を伝える。そしてユースフはイラクに着任してハーリドを捕縛することになる。

以上のように、ハーリド解任の理由が彼の財産であれ、あるいは彼の傲慢な言動であれ、ヒシャームのハーリドに対する心象の悪化が解任の直接的な原因とされている点では共通している。そして、こうしたハーリド解任の叙述においては、任命時の叙述にあった南北アラブの部族間対立をう

かがわせる文脈があらわれていないことも指摘できる。『歴史』の叙述において、ハーリドの任命は南北アラブの部族対立の文脈で述べられているのに対し、解任についてはヒシャームとハーリドの個人的な関係性で述べられているのである。

2. 『征服』の叙述

『征服』では、ハーリドの解任自体にはまったく触れられず、彼の息子であるイブン・ハーリドが後任とされたことが次のように述べられている。

曰く：アサド Asad b. 'Abd Allāh al-Qasrī はイブン・スライジュ al-Hārith b. Surayj と戦うべく大軍を率いてマルウの街から出撃した。彼がバルフの街に至ると、定めの時が彼に追いついて、彼はその地で亡くなった。彼の兄弟であるハーリドはイラクに任命されていた。

曰く：ヒシャームはイブン・ハーリド Yazīd b. Khalīd に使者を送り、彼の父の後任として彼をイラク全域に任命した²⁷⁾。

その後、イブン・ハーリドによるイラク統治は住民の反発を受け、ヒシャームに対するイラク住民の訴えによりイブン・ハーリドは解任される。そしてヒシャームはユースフをイラク総督に任命し、前任者イブン・ハーリドを拷問にかけよう命じる。

イブン・ハーリドはイラクの人々に圧政をおこなった。彼は彼らの財産を奪い、男たちを殺害した。その結果、彼らの中で限界に達した。曰く：[イラクの] 人々はヒシャームに対して彼（イブン・ハーリド）に対する不満を訴えた。その話が終わると、それについて書簡がしたためられた。

曰く：ヒシャームはユースフを呼び、彼をバスラとクーファおよびそれらの領域を含むイラク全域に任命した。そして、イブン・ハーリドを捕えて、彼に言うことを聞かせ、彼がイラクの人々から収奪した富の中で手元にあるものを取るために、彼をあらゆる拷問にかけるよう彼（ユースフ）に命じた²⁸⁾。

『征服』のハーリド任命の叙述においては、前任者であるイブン・フバイラの顛末が主たる内容であった。そしてこの解任の叙述においては、そもそもハーリドの解任自体に言及しておらず、イブン・ハーリドを後任イラク総督に任じたことが述べられているのみである。こうして『征服』の叙述からハーリドは静かに退場していき、その後言及されることはない。こうした『征服』の叙述では、『歴史』と比べて、ハーリドに対する関心の薄さが明らかである。また、『征服』ではハーリドの後任総督として、ユースフの前にイブン・ハーリドを挟んでいる点には注意が必要である。このイブン・ハーリドへの言及は、『征服』のその後の叙述の展開において、『歴史』との大きな相違を生じさせていくことになる。

III. ユースフによる尋問とザイド・ブン・アリー

1. 『歴史』の叙述

『歴史』の叙述では、前章で見たように、ハーリドの解任とユースフの任命が同時に起きており、ユースフの前任者はハーリドである。ユースフのイラク総督着任後の叙述は以下のようにになっている。イラク総督となったユースフは、ハーリドを投獄し、財産について尋問する。そしてその過程で、ハーリド側からアリー家のザイド・ブン・アリー-Zayd b. 'Alī b. Ḥusayn²⁹⁾への贈与の疑いが浮上する。やがてユースフはザイドをイラクに召喚して尋問する。

この場面で、『歴史』では二通りの伝承が述べられている。最初の伝承はハーリドがザイドたちへの贈与を口にしたとするものである³⁰⁾。そしてザイドたちがイラクに召喚され、ユースフの尋問によって贈与は否定される。

彼ら（ザイドたち）がユースフのもとに来ると、彼は彼らを迎え入れて歓待した。そして彼はハーリドに人を遣わした。やがて彼（ハーリド）が連行されてきた。ユースフはハーリドに言った。「これらの者たちは誓いを立てた。これは彼らに対する疑いを晴らす信徒の長からの書簡だ。お前は自分の言い分の証拠はあるか」。ハーリドは証拠を出せなかった。彼らは彼（ハーリド）に向かって言った。「何がお前をそうさせたのか」。ハーリドは言った。「ユースフは私を激しく拷問した。だから私は、お前たちが来るまでに神が私を救ってくださることを期待して、ああ言ったのだ」。かくしてユースフは彼らを解放した。彼らの内、ジュマフ家とマフズーム家の二人のクライシュ族はメディナへ戻り、ダーワード・ブン・アリーとザイド・ブン・アリーはクーファに残った³¹⁾。

そして、次の伝承はイブン・ハーリドの告白によるとするものである³²⁾。こちらの伝承でも、やはりザイドへの贈与の事実は否定される。これら二通りの伝承のいずれが正しいとの判断はつかないが、『歴史』のこの場面の叙述で中心となっているのは、ハーリドやイブン・ハーリドではなくザイドである。『歴史』ではユースフによるハーリドの投獄・尋問、ザイドの召喚、そしてその後のイラクでのザイドの反乱と鎮圧が一連の伝承群として提示されている³³⁾。つまりこの場面は、ザイドの反乱への導入部分として、同反乱について述べる文脈の中に位置付けられているのであ

る。したがって、こうした『歴史』の文脈では、ザイドがイラクに滞在したという事実がこの場面で最も重要な点であり、その原因となった人物がいずれであるかは副次的な要素なのだと考えられる。

また、ザイドへの贈与を告白したのがハーリドであれイブン・ハーリドであれ、どちらの伝承においてもその発言を引き出したのが、ハーリドの財産没収を目的としたユースフであるという点は共通している。こうしたハーリドの財産に対するユースフの執着は、後の場面においてもあらわれ、やがてハーリドを死に至らしめる『歴史』の文脈を形成することになる。この点については次章で述べたい。

2. 『征服』の叙述

『征服』の叙述では、前章で見たように、ハーリドの解任後にその息子であるイブン・ハーリドがイラク総督に任命されている。結局すぐに解任されてユースフが任命されるのだが、ユースフの前任者がハーリドではなくイブン・ハーリドとなっているため、ユースフによる前任者の投獄・拷問はイブン・ハーリドに対しておこなわれることになる。

曰く：ユースフはイラクへ向かった。彼はまずヒーラへ行き、そこから各地へ代官を派遣した。その後、イブン・ハーリドに対して人を派遣し、彼をバスラから自分のもとへ移送させた。そして彼（ユースフ）は彼（イブン・ハーリド）に、財産の内で手元にあるものすべてを要求した。そして彼（イブン・ハーリド）の財産を明らかにするために、彼（ユースフ）は彼を様々な拷問にかけることを始めた。イブン・ハーリドは彼に言った。「総督よ、私を殺すことを急いではいけない。私には人々に貸した財産がある。私はそれを彼らから取り戻して、貴方に差し出そう」。するとユースフは言った。「お前の言う、その財産を預

けた者たちとは誰だ」。彼（イブン・ハーリド）は言った。「神よ、総督を嘉し給え。それはザイド・ブン・アリー-Zayd b. 'Alī b. Ḥusayn b. 'Alī, ムハンマド・ブン・ウマル Muḥammad b. 'Umar b. 'Alī b. Abī Ṭalib, ダーウド・ブン・アリー-Dāwud b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās b. 'Abd al-Muṭṭalib, イブラーヒーム・ブン・サアド Ibrāhīm b. Sa'd b. 'Abd al-Raḥmān b. 'Awf al-Zuhrī, そしてアイユーブ・ブン・サラマ Ayyūb b. Salamah b. 'Abd Allāh al-Makhzūmī である」³⁴⁾。

このイブン・ハーリドの証言により、『歴史』と同じく、ザイドたちが召喚されて尋問されることになる。

曰く：こうして人々（ザイドたち）はシリアを出て、イラクへと向かった。やがて彼らはヒーラに着いた。ユースフはこの時ヒーラにいた。彼らは〔ユースフの部屋に〕入室し、挨拶を述べた。彼（ユースフ）も彼らに挨拶を返した。そして彼は彼らに近付いて、彼らを歓迎した。彼はザイドを一段高い所へと招いて隣に座らせ、親しく言葉を交わした。その後、彼（ユースフ）は彼（ザイド）とその一行に向かって次のように言った。「イブン・ハーリドが投獄されているのだが、彼はお前たちに財産を委ねたと言っている。お前たちは何か言うことはあるか」。

曰く：彼ら全員がそのことを否定して、次のように言った。「神が総督に平安をもたらしますように。彼は我々に財産を委ねてなどない。我々はそのような主張や要求を受け入れない」。

曰く：ユースフはイブン・ハーリドについて命じ、彼を連れて来させた。そしてユースフは彼に言った。「ここにいるのはお前が名を挙げた者たちだ。お前のもとにある証拠を示せ」。するとイブン・ハーリ

ドは言った。「総督よ、いかなる理由、いかなる目的においても、大小問わず彼らに委ねたものなど私にはなく、主張も要求もありません」。

曰く：ユースフは怒って言った。「お前は私や信徒の長を笑い者にしたというのか」。その後、人々（ザイドたち）は午後の礼拝の後に大モスクへ行き、誓いをたてた。そして彼（ユースフ）は彼らの行く先を開放した。彼らの内三人はメディナへ向かい、ザイドとムハンマド・ブン・ウマルはクーファに留まった。

曰く：ユースフはイブン・ハーリドをあらゆる拷問にかけ、遂に彼は死んだ³⁵⁾。

この後、『歴史』と同じくザイドは疑いの晴れた後もイラクに留まり、やがて反乱を起こすことになる。したがって、『歴史』と『征服』ともに、ユースフのイラク総督就任直後におこなわれた前任者の投獄・審問は、後に続くザイドの反乱への導入となっているのである。

また、『征服』の叙述では、この時点でイブン・ハーリドが殺害されている。そしてハーリドもイブン・ハーリドも、これ以降言及されることはない。そのため、次章で述べる『歴史』におけるワリード2世期のハーリドの投獄や殺害は、『征服』の叙述には存在しない。

IV. ハーリドの死

前章で言及したように、ハーリドの死について『征服』では述べられていない。そこで本章では『歴史』の叙述のみを検討する。

『歴史』では、18カ月の投獄の後、121/739-740年にハーリドはヒシャームの命令で解放され³⁶⁾、ダマスカスへと移る³⁷⁾。そしてハーリドの一族は、ヒシャームが没して、次のワリード2世の治世となるまでダマスカス

にいたとされる³⁸⁾。やがてハーリドとワリード2世に確執が生じ、それが原因でハーリドはダマスカスで投獄される³⁹⁾。この確執の原因となったワリード2世殺害の計画が次のように述べられている。

クダア族、特にダマスカスのヤマンの者たちが、ワリードの殺害を決意した。

(中略)

[彼らは] ハーリド・ブン・アブドゥッラーのもとを訪れ、自分たちの企てに参加してくれるよう求めた⁴⁰⁾。

南アラブの者たちがワリード2世の殺害を計画し、ハーリドに参加を求めている。しかしハーリドはこれを拒み、逆にワリード2世に注意を促す。ところが、ワリード2世はそうしたハーリドの言を疎み、ついには投獄してしまう。やがて投獄されていたハーリドの身柄を、イラク総督ユースフが財産没収を目的にワリード2世から買い取る⁴¹⁾。そしてハーリドはユースフによって拷問され、死亡するのである⁴²⁾。

ハーリド殺害に至る『歴史』の叙述は以上の通りである。一連の叙述からは、まずハーリド自身にはワリード2世を害する意志のないことが言明されていることがわかる。しかしワリード2世はハーリドを疎んじ、そこにハーリドの財産を狙うユースフが絡むことで、ハーリドは殺害されるのである。『歴史』の叙述においてハーリド殺害の原因は、ワリード2世とハーリドの関係、およびユースフのハーリドの財産への執着に帰せられている。発端となったのは南アラブによるワリード2世殺害計画であるが、ハーリドはむしろこれを否定する行動をとっている。以上のことから、一連の叙述においてハーリド、ワリード2世、ユースフの三者の言動は、いずれも部族間対立の文脈の中には位置していないことがわかる。しかし、

この後に起きる第三次内乱では、彼らの言動が部族間対立の文脈で解釈されていくことになるのである。

V. 第三次内乱

ワリード2世の統治に不満を抱いた人々は、ヤズィード3世のもとに集って軍を起し、ワリード2世を殺害する。ヤズィード3世はカリフとなるが間もなく没し、その兄弟イブラーヒームがカリフとなる。するとその直後、アルメニア・アゼルバイジャン総督であったマルワーン2世が、ワリード2世の復讐を掲げて軍を起し、ダマスカスへ進軍する。イブラーヒームはダマスカスから逃亡し、マルワーン2世がカリフとなる。以上が第三次内乱の経過である。

1. 『歴史』の叙述

前章で見たように、『歴史』の叙述においてハーリドは第三次内乱以前に殺害されている。しかし、ハーリドは第三次内乱の叙述において重要な役割を果たしている。シリアにおける南アラブ勢力を反ワリード2世へと向かわせたシンボルとして、ハーリドの死が言及されているのである。ハーリドの死に関する詩が提示され、その詩に関して次の二つの解釈が述べられている。

ワリード・ブン・ヤズィード（ワリード2世）は詩を詠んだ。その詩の中で、彼はハーリド・ブン・アブドゥッラーの救出に失敗したヤマンの者たちを非難した⁴³⁾。

その詩はとあるヤマンの者によって詠まれたものである。彼はヤマンの者たちにワリードに対する蜂起を煽るために、ワリードの口を使っ

たのである⁴⁴⁾。

このように、ハーリドと南アラブが関連付けられている。そして『歴史』の叙述における両者の関連付けは、この後も第三次内乱の過程で度々あらわれる。まず、ワリード2世に反発する勢力を糾合する要因として、ハーリドが次のように述べられている。

ワリード（1世）およびヒシャームの息子たちは、カァカー家やヤマンの者たちと同じく、ワリード（2世）に深い嫌悪を抱いていた。それは彼のハーリド・ブン・アブドゥッラーに対する仕打ちのためであった。そこでヤマンの者たちはヤズィード・ブン・アルワリード（ヤズィード3世）のもとへ行き、忠誠の誓いを受けるよう説得しようとした⁴⁵⁾。

そしてワリード2世殺害後、兵士の一人がハーリドを偲ぶ様子が次のように述べられている。

ワリードを殺した日、ビシュル・ブン・ハルバー・アルアーミリーを私（ドゥカイン）は見た。彼はバフラー門を剣で打ちながら言っていた。

インドの剣を手にはり、ハーリドのために泣こう

彼の功績が無に帰すことのないように⁴⁶⁾

先に確認したように、ハーリド自身がワリード2世の廃位や殺害を志向していた様子はまったく述べられていなかった。しかしその死後、『歴史』の叙述においてハーリドは南アラブおよび反ワリード2世勢力のシンボル

となっていったのである。このことは、第三次内乱末期にマルワーン2世の軍がダマスカスに迫った場面においてもあらわれている。

ヤズィード（3世）の治世およびイブラーヒームの2カ月と10日の治世の間、ユースフは獄に繋がれていた。やがてマルワーン（2世）がシリア地方に進軍してダマスカスに近付くと、彼（イブラーヒーム）はヤズィード・ブン・ハーリド（イブン・ハーリド）に彼（ユースフ）の殺害を命じた。そこでヤズィードはハーリドのマウラーであったアブー・アルアサド Abū al-Asad とその他の部下たちを派遣した。

（中略）

彼（アブー・アルアサド）はユースフを〔獄から〕引き出して処刑した⁴⁷⁾。

ワリード2世の復讐を掲げるマルワーン2世の軍が迫ったことにより、ハーリドを殺害した張本人であるユースフの処罰をハーリドの息子が命じられ、それをハーリドのマウラーが実行している。ワリード2世を殺害した勢力にとって、ユースフはハーリドの復讐の対象であり、またその復讐をおこなうにふさわしい人物はハーリドの縁者だったのである。このように『歴史』の叙述においては、ヤズィード3世およびイブラーヒームの勢力はあくまでも南アラブが中心であり、第三次内乱の最終段階においてもハーリドの存在は南アラブ勢力のシンボルとして機能しているのである。

2. 『征服』の叙述

前述のように、『征服』ではハーリドもイブン・ハーリドも第三次内乱の叙述では言及されていない。ここでは『征服』において第三次内乱がいかに述べられているのかを検討する。まず、ワリード2世の振る舞いに対

する反感が殺害の原因として端的に述べられている。

やがて彼（ワリード2世）とヤズィード・ブン・アルワリードの間で対立が生じた。それは彼の放埒さ、敬虔な者に対する高慢な態度、そして彼が損失や過ち、飲み仲間 [との付き合い]、漁色を続けたことによるものであった⁴⁸⁾。

そして挙兵したヤズィード3世の勢力は、「シリアの人々」とのみ記されている。

彼のそのような状態は、短い間しか続かなかった。というのも、やがてヤズィード・ブン・アルワリード・ブン・アブドゥルマリクが彼に対してシリアの人々を集めたためである⁴⁹⁾。

このように、ワリード2世殺害に至る過程で部族間対立の言説は見られない。そして第三次内乱末期、マルワーン2世がダマスカスに入城する場面でも、ユースフの殺害等は一切述べられていない。

マルワーンは進軍し、やがてダマスカスに至った。するとイブラーヒームが [ダマスカスから] 出た。彼は2カ月と10日に満たない日数で自らカリフ位から降りた。カリフ位はマルワーンのもとへ移った。彼はダマスカスに入城すると、ハーリド・ブン・ヤズィード・ブン・アブドゥルマリク Khālid b. Yazīd b. 'Abd al-Malik とアブドゥルアズィーズ・ブン・アルハッジャージュ・ブン・アブドゥルマリク 'Abd al-'Azīz b. al-Hajjāj b. 'Abd al-Malik を捕えて殺した。彼は二人をダマスカスのジャービヤ門で磔にした。そしてマルワーンは人々を

ともなって大モスクへ行って集団礼拝をおこない、その後出て行って
ダイル・アイユブで馬から降りた。この地の人々は彼に忠誠の誓い
をおこない、彼のカリフ位を承認した。これは127年のラビーア第一
月の14日前のことであった⁵⁰⁾。

以上が『征服』における第三次内乱の叙述である。ワリード2世殺害に
おいてヤズィード3世の率いた兵士は「シリアの人々」とされており、
「ヤマン」とは述べられていない。『歴史』で「ヤマン」として言及されて
いた人々もシリア軍の兵士であることから、その実態は同じであるとも思
われるが、両史料の叙述に注目してきた本稿の問題意識においては、この
用語の違いこそが重要である。これまでに見てきたように、『歴史』では
ハーリドの任命は部族間対立の言説を用いて述べられていた。そしてこの
言説は、ハーリドの殺害を経て第三次内乱の発端となったワリード2世殺
害の大きな要因としてあらわれていた。『歴史』の叙述では、部族間対立
の文脈によって、ハーリド父子とユースフは第三次内乱と結びつけられて
いるのである。しかし、『征服』においては事情がまったく異なってい
る。『征服』ではハーリドの殺害も、部族間対立の文脈もなかった。そし
て『歴史』でユースフへの報復を命じられたイブン・ハーリドは、『征服』
では逆にユースフによって既に殺害されており、またユースフの死に関す
る言及もないのである。このように、『征服』の叙述では、ハーリド父子
とユースフは第三次内乱と切り離されており、第三次内乱はあくまでもウ
マイヤ朝カリフの交代劇として述べられているのである。

VI. まとめと考察

本稿では、ウマイヤ朝後期のヒシャーム期から第三次内乱に至る過程に
ついて、特にイラク総督ハーリドの描かれ方に注目して、『歴史』と『征

服』の叙述を見てきた。それをまとめると次のようになろう。『歴史』の叙述においては、ハーリドは南アラブの首魁として位置付けられていた。しかし、それはハーリド自身の言動によるというよりも、むしろ周囲の者たち（北アラブ、南アラブ双方を含む）の言説として提示されていた。こうした言説は、ハーリド個人の生涯に関する叙述に留まらず、彼の死後に生じた第三次内乱において一層強調されていた。『歴史』の叙述において、第三次内乱とは南北アラブの部族間対立が激化して生じた事象であり、その原因としてハーリドの死が位置付けられていたのであった。他方の『征服』においては、ハーリドに関する言及は非常に少なかった。ハーリドの解任に関する叙述はほぼ皆無であり、また後任総督として息子イブン・ハーリドに言及していることから、ハーリド殺害の叙述は存在していなかった。必然的に、第三次内乱においてもハーリド殺害の影響や、それにとまなう部族間対立の要素はまったく見られなかった。『征服』の叙述において、ハーリドはあくまでも一地方総督に過ぎず、第三次内乱に至る原因はシリアのウマイヤ家内でのカリフ位をめぐる抗争であった。

このように、『歴史』と『征服』におけるウマイヤ朝後期の叙述では、ハーリドに関する叙述の多少と部族間対立の文脈の有無が一致しており、これと関連して、第三次内乱に対する理解の異なっていることが明らかとなった。この相違から、ウマイヤ朝崩壊の原因として『歴史』では部族間対立が、『征服』ではウマイヤ家の内部抗争が、それぞれ位置付けられているものと考えられる。

また、前稿で両史料叙述の傾向性として指摘した、『歴史』における事象間の連続性と『征服』における事象ごとの完結性を、本稿の分析からもうかがうことができる。『歴史』の叙述においては、ハーリドに関する叙述が部族間対立の文脈の中に位置付けられたことで、第三次内乱へと至る歴史の展開が提示されていた⁵¹⁾。これに対し、『征服』の叙述では、ハー

リドやユースフといったイラク提督たちに関する叙述と、第三次内乱の叙述は完全に分離されていた。イラク提督については後任者による前任者への追及が、第三次内乱についてはウマイヤ家内でのカリフ位をめぐる争いが、それぞれ個別の事象として提示されていた⁵²⁾。ウマイヤ朝中期の叙述から見出された両史料の傾向性が、後期の叙述からも確認されたのである。今後、両史料叙述を分析していく際には、この傾向性を考慮に入れる必要があるだろう。

おわりに

第三次内乱で即位したマルワーン2世はその後、シリア周辺の支配を再確立するべく奔走することになる。そして、彼がシリアの再統一に忙殺されていた間に、東方のホラーサーンにおいて、アッバース朝を成立させる革命運動が進行していく。本稿の分析で明らかとなった両史料叙述の相違は、こうしたウマイヤ朝からアッバース朝への王朝交代期の描かれ方、さらにはアッバース朝に対する理解のあり方とも関わっていることが考えられる。今回得られた成果がアッバース朝革命の展開の描かれ方とどのように関係しているのか、分析を進めていく必要があるだろう。今後の課題である。

注

- 1) Wellhausen, J., *The Arab Kingdom and Its Fall*, M. Weir tr., Calcutta, 1927, pp.325-350; Shaban, M. A., *Islamic History : A new interpretation I A.D. 600-750 (A.H. 132)*, Cambridge, 1971, pp.138-152; Hawting, G. R., *The First Dynasty of Islam*, London, 1986, pp.72-89; Blankinship, K.Y., *The End of the Jihād State : The Reign of Hishām b. 'Abd al-Malik and the Collapse of the Umayyads*, Albany, 1994; Kennedy, H., *The Prophet and the Age of Caliphates*, 2 ed., Edinburgh, 2004, pp.103-112; *The Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Leiden, 1964-2002 (以下 *EI* 2), s.v. "HISHĀM B. 'ABD AL-MALIK."

- 2) Judd, S., “Medieval Explanations for the Fall of the Umayyads,” A. Borrut & P.M. Cobb eds., *Umayyad Legacies Medieval Memories from Syria to Spain*, Leiden, 2010, pp. 89-104.
- 3) al-Ṭabarī, Abū Jaʿfar Muḥammad b. Jarīr (d.310/923), M. J. de Goeje *et al.* eds., *Taʾrīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, Leiden, 1879-1901 (repr. 1964-65), 3 series.
- 4) Ibn Aʿtham al-Kūfī, Abū Muḥammad Aḥmad (d.ca.314/926), M.ʿA. M. Khān *et al.* eds., *Kitāb al-Futūḥ*, Haydarabad, 1968-75, 8 vols.
- 5) Robinson, C.F., *Islamic Historiography*, Cambridge, 2003, pp. 40-42.
- 6) 松本隆志「『歴史』と『征服』におけるイブン・アルアシュアスの反乱—ウマイヤ朝史史料研究の一試論—」『オリエント』第52巻第2号, 2009年, 125-142頁; 同「『歴史』と『征服』におけるハッジヤージュ像の検討—ホラーサーン総督ヤズィード解任に至る叙述について—」『中央大学アジア史研究』第36号, 2011年, 121-144頁。
- 7) ハーリドについては以下を参照。EI 2, s.v. “KHĀLID AL-QASR”
- 8) al-Ṭabarī, *op.cit.*, II, pp. 1467-1468. イスナードは無し。
- 9) その統治に不満を抱いたアラブ・ムスリムによって, 3代正統カリフ・ウスマーン・ブン・アッファーンが殺害された事件のこと。
- 10) ウマイヤ朝5代カリフ・アブドゥルマリクとイラク総督ハッジヤージュに對する不満から, イラク以東の領域を巻き込んで生じたイブン・アルアシュアスのこと。
- 11) ウマイヤ朝9代カリフ・ヤズィード2世に対してバスラを拠点に反乱した, ヤズィード・ブン・アルムハッラブの反乱のこと。
- 12) *Ibid.*, p. 1468. [ムハンマド・ブン・サラーム Muḥammad b. Salām al-Jumahī — アブドゥルカーヒル ʿAbd al-Qāhir b. al-Sarī — ウマル ʿUmar b. Yazīd b. ʿUmayr al-Usayyidī].
- 13) ウマイヤ朝カリフは皆ウマイヤ家に属するが, その中でも初代カリフ・ムアーウィヤ1世から3代カリフ・ムアーウィヤ2世まではスフヤーン家と呼ばれる。そして4代カリフ・マルワーン1世から同じウマイヤ家内の別系統へカリフ位が移り, 以降のカリフはすべて彼の子孫であることから, マルワーン家と呼ばれる。ウマイヤ家は北アラブ系のクライシュ族に属する。
- 14) *Ibid.*, pp. 1468-1469. [アブドゥラッザーク ʿAbd al-Razzāq (b. Humām b. Nāfiʿ al-Ṣanʿānī) — ハンマード Ḥammād b. Saʿīd al-Ṣanʿānī — ズィヤード Ziyād b. ʿUbayd Allāh (b. ʿAbd al-Ḥijr b. ʿAbd al-Maʿdān al-Ḥārithī)].
- 15) *Ibid.*, pp. 1469-1471. シュルタ shurṭah は治安維持を主な職務とする組織で

あり、その長官職は地方行政上の要職であった。

- 16) Ibn A'tham, *op. cit.*, VIII, p. 35.
- 17) *Ibid.*, pp. 35-36.
- 18) *Ibid.*, p. 36.
- 19) *Ibid.*, p. 37.
- 20) *Ibid.*, p. 37.
- 21) *Ibid.*, p. 35.
- 22) al-Ṭabarī, *op. cit.*, II, pp. 1641-1647.
- 23) *Ibid.*, pp. 1641-1642, 1647.
- 24) *Ibid.*, pp. 1641-1642. イスナードは無し.
- 25) 自らを誇るハーリドの発言 (*Ibid.*, pp. 1642, 1646-7), クライシュ族に対するハーリドの振る舞い (*Ibid.*, pp. 1642-1646), ヒシャームに対するハーリドの中傷的な発言 (*Ibid.*, pp. 1646, 1647)。いずれもイスナードは無し。
- 26) *Ibid.*, p. 1647.
- 27) Ibn A'tham, *op. cit.*, VIII, p. 107.
- 28) *Ibid.*, p. 107.
- 29) ザイドは4代正統カリフ・アリーの曾孫であり、カルバラーで殺害されたフサインの孫。ザイドの反乱について詳細は以下を参照。EI 2, s.v. "ZAYD B. 'ALĪ"; 清水和裕「裏切るクーファ市民ーウマイヤ朝末期ザイドの反乱にみる民衆の政治意識の結末」私市正年ほか編『イスラーム地域研究叢書3 イスラームの民主化と民衆運動』東京大学出版会、2004年、53-75頁。
- 30) *Ibid.*, pp. 1667-1668 [ハイサム al-Haytham b. 'Adī — イブン・アイヤーシュ 'Abd Allāh b. 'Ayyāsh], 1671 [アブー・ウバイダ Abū 'Ubaydah].
- 31) *Ibid.*, p. 1678 [アブー・ウバイダ].
- 32) *Ibid.*, pp. 1668-1670 [イブン・アルカルビー-Hishām b. Muḥammad al-Kalbī — アブー・ミフナフ Abū Mikhnaḥ]. このように、『歴史』においてもイブン・ハーリドは登場するが、その描かれ方は『征服』とは大きく異なっている。
- 33) *Ibid.*, pp. 1667-1688, 1698-1716.
- 34) Ibn A'tham, *op. cit.*, VIII, p. 108.
- 35) *Ibid.*, pp. 109-110.
- 36) al-Ṭabarī, *op. cit.*, II, pp. 1812-1813. イスナードは無し。
- 37) *Ibid.*, pp. 1813-1816. [ハイサム — その伝承者たち].
- 38) *Ibid.*, pp. 1816-1817. [アブー・ザイド Abū Zayd — アフマド・ブン・ムアーウィヤ Aḥmad b. Mu'āwiyah — アブー・アルハッターブ Abū al-

Khaṭṭāb].

- 39) ワリード2世が後継カリフとして息子への忠誠の誓いを求めたが、ハーリドは拒否した (*Ibid.*, pp. 1776-1777)。またワリード2世殺害の計画に誘われたハーリドは参加を拒み、逆にワリード2世に身を憤むよう進言したがかえって疎まれて投獄された (*Ibid.*, pp. 1777-1778)。他に、ヒシャームの時代から投獄されていたと述べる別伝承もある (*Ibid.*, pp. 1816-1822)。いずれにせよ、イラク総督解任後のハーリドは政治の中心から離れていたと言える。
- 40) *Ibid.*, pp. 1778.
- 41) *Ibid.*, pp. 1778-1780.
- 42) *Ibid.*, pp. 1780, 1822.
- 43) *Ibid.*, pp. 1780. [ハイサム].
- 44) *Ibid.*, pp. 1780-1. [アフマド・ブン・ズハイル Aḥmad b. Zuhayr — アリー・ブン・ムハンマド 'Alī b. Muḥammad — カルブ族内のアーミル族のムハンマド・ブン・サイード・アルアーミリー Muḥammad b. Sa'īd al-Āmirī].
- 45) *Ibid.*, pp. 1807. [アフマド・ブン・ズハイル — アリー・ブン・ムハンマド].
- 46) *Ibid.*, pp. 1808-9. [アフマド・ブン・ズハイル — アリー・ブン・ムハンマド - アムル・ブン・マルワーン・アルカルビー 'Amr b. Marwān al-Kalbī - ドゥカイン・ブン・シャンマーフ・アルカルビー・アルアーミリー Dukayn b. Shammāf al-Kalbī al-Āmirī].
- 47) *Ibid.*, pp. 1841-1842.
- 48) Ibn A'tham, *op. cit.*, VIII, p. 140.
- 49) *Ibid.*, p. 140.
- 50) *Ibid.*, pp. 141-142.
- 51) 『歴史』では、イブン・アルアシュアスの反乱においてはイラクとシリアの地方間の抗争が、ヤズィード解任においてはカリフ・アブドゥルマリクとイラク総督ハッジャージュの強い連帯が文脈として見出された。
- 52) 『征服』では、イブン・アルアシュアスの反乱、ヤズィードの解任ともに登場人物間の権力闘争として完結性をもって提示されていた。